

二〇二三年度 桐朋女子中学校入学試験 (A入試)

筆記試験 (国語)

受 験 番 号

氏 名

【注意】

- 一、問題冊子が配られても、開いてはいけません。
- 二、問題冊子は1ページから18ページまであります。
- 三、「はじめてください」と言われたら、まず、問題冊子の表紙と解答用紙二枚に、それぞれ受験番号と氏名を書きなさい。
- 四、答えはすべて解答用紙に書きなさい。
- 五、問題冊子に書きこみをしてかまいません。
- 六、「やめてください」と言われたら、すぐに筆記用具をおき、解答用紙も問題冊子も表を上にして、机の上におきなさい。
- 七、試験時間は四五分間です。

一、次の①～⑮の——線部のカタカナを漢字に直しなさい。また、⑩～⑳の——線部の読みをひらがなで答えなさい。

- | | | | |
|---|--------------|---|---------------|
| ① | テンケイテキなまちがい | ② | カゴの中で小鳥をカウ |
| ③ | 技術開発のキョウソウ | ④ | 新しいコウシャを建てる |
| ⑤ | ゼイキンをはらう | ⑥ | ジツセキのある会社 |
| ⑦ | 無実をシヨウメイする | ⑧ | 準備がトトノウ |
| ⑨ | 英語をツウヤクする | ⑩ | キュウムに追われる |
| ⑪ | イチガンとなって戦う | ⑫ | 勢いにおされてシリゾク |
| ⑬ | ユウコウ期限を調べる | ⑭ | ボウエキの仕事につく |
| ⑮ | 入学式でシユクジを述べる | ⑯ | 冬季オリンピックを観戦する |
| ⑰ | 命令に逆らう | ⑱ | お祭りで射的を楽しむ |
| ⑲ | 教訓をふまえる | ⑳ | 連なって飛ぶ白鳥 |

二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。ただし、字数制限のある問いに答える場合、「、」「や」「」等も一字と数えます。

- 「ウミガメの鼻にストローが刺さっていた」
「死んだクジラやジュゴンのお腹なかから、大量のビニール袋ぶくろやプラスチックの破片はへんが出てきた」
「北極の氷が溶けたこととで狩りかができず、ホッキョクグマは絶滅ぜつめつ寸前」
「ウミガメや海鳥がプラスチックの網あみに絡からまり、死んでいる」

そうしたニュースを耳にしたとき、きっと皆さんは、「かわいそう」「助けてあげたい」と思うでしょう。

また、サンゴ礁や海藻類が海から消え、魚たちが危機にさらされていること、それが地球温暖化や気候変動と関係していると聞けば、「大変なことが起きているんだな」と感じるはずです。

けれど、こうした悲劇が、自分たちの生活の延長線上で起きていること、自分たちのライフスタイルが環境破壊を招いていることをしっかり理解している人はほんのひとにぎりです。

海は広くて一見すると何の心配もないように思えますが、ちゃんと意識を向ければ、海の悲鳴が聞こえてきます。

ボクは、実際に海に潜り、この目で「今海に何が起きているか」を見てきました。また、環境活動家として、科学者や研究者と共に調査をしたり、彼らからたくさんのお話を学びました。それを、この本の中で分かりやすく皆さんに伝えていきたいと思っています。

本を読み進めると、さまざまな事実を前に、ショックを受けたり、不安になる人もいるでしょう。もしかしたら、「そんなこと知りたくなかった」と感じてしまうかもしれません。

また、「じゃあ、何から始めれば良いの?」「問題が大きすぎて、どうすればいいかわからない」と悩む人もいます。

そんな時、是非覚えておいて欲しいのが、

“ベストはなかなか難しい、でもベターならできる”
ということなのです。

「A」、プラスチック製品が環境に良くないことが分かっても、今すぐ、プラスチックを全く使わ

ない生活ができるわけではありません。

何しろ、私たちの生活はプラスチックであふれかえっているからです。

けれど、「ストローやペットボトルといった、使い捨てのプラスチック製品はなるべく使わない」「野菜や果物は、ビニールに入っているものではなく、裸はだかで売られているものを選ぶ」「可能な限り、包装の少ない商品を選ぶ」ことはできるはずですよ。

マイバッグやマイボトル運動はその一つです。

また、二酸化炭素が環境を破壊していることを知っていても、修学旅行でさまざまな乗り物に乗る場合、「私だけ自転車で行きます」とは言えないでしょう。

「B」、友だちや家族に「実は飛行機の出す二酸化炭素の量ってね…」などと、大切なメッセージを伝え、考えるきっかけ作りはできるはずですよ。

それが、「ベストはなかなか難しい、でもベターならできる」ということです。

「C」、事実や現実から目を背そむけず、「知ること」には積極的で行ってください。知ることです。① 題点に気付き、次のアクションにつながるからです。

① 知ることは希望です。

そして、自分の意見だけを主張するのではなく、「それは違ちがう！」と思う声にも、是非耳をかたむけてください。さまざまな意見と、自分の意見を照らし合わせ、考えること。それがとても大切だからです。さらに、相手の意見を尊重しながら話し合いができたなら、こんなに素晴らしいことではないと思います。

地球上の生命は、約40億年前、原始の海で誕生しました。その命の源である海が待ったなしのピンチにさらされています。海を守ることは、人間を含めすべての生き物を守り、地球そのものを守ることに

つながります。

友だちや家族と環境の話をしたり、自分の生活を見直したり、小さくてもいいから活動を始めるきっかけにして欲しい。そんな願いを込めて、ボクはこの本を書きました。

(中略)

2006年、アメリカの科学雑誌『Science(サイエンス)』に、ショッキングな論文が発表されました。それは、「2048年には海から食用の魚がいなくなる」という内容です。

気候変動による水温の上昇、陸地の開発行為による海水の汚染、後に詳しく説明しますが、海洋プラスチックゴミなど、さまざまな問題が海にのしかかっていることから、このような説が考えられました。たしかに、この50年間で、魚類は9割いなくなっているといわれています。

では、魚たちはどこに行ったのでしょうか。多くは私たちのお腹の中です。

「そんなに魚がいけないのなら、スーパーや回転寿司に、いっぱい魚が並んでいるのはおかしい」と思った人もいるかもしれませんね。

日本でたくさん魚が売られているのは、販売業者が世界中からかき集めて売っているからです。その結果、「魚がたくさんとれるのに自分たちの口には入らず、ほとんど輸出してしまう」という貧しい国もあるのです。

また、サケだ、タイだ、ヒラメだと思って食べていた魚が、本当は全く違う魚だということもあります。そうした魚を代用魚といいます。

代用魚は、漁獲量が減ったり値段が高くなりすぎたり、手に入りにくくなった魚介類の代わりに加工して使われます。

加工後の見た目や味が似ている、海外の魚や深海魚などが利用されているのです。ですから、「お店にたくさん並んでいるから魚は減ってない。大丈夫」と、安心してもらえません。

上の図は、1965年から2016年までの50年間の日本の漁業・養殖業の生産量の推移を表しています。(図略)

1984年をピークにどんどん下がっているのが分かりますね。計算してみると、なんと66%も減っているのです。

このグラフでは2016年までしか見られませんが、その後も海の環境は悪化していることが考えられるので、漁獲量はさらに減っていることが予測できるでしょう。

そう考えると、「^②2048年には海から食用魚がいなくなる」という説は、決して大きさではなく、むしろその予想は早まってしまいかもしれないとボクは思うのです。

今、日本で行われている漁の方法は、^③TAC (Total Allowable Catch) といっています。特定の魚ごとに捕獲できる総量を決めた方法です。

もう少し分かりやすく説明しましょう。

たとえば、Aという魚に対して「今年の上限は500トンですよ」と発表されたとします。すると、解禁日には業者が「よいドン！」と一斉に漁場に向かい、とにかく捕りまくります。

上限が決まっているので早くしないと、他の人に捕られてしまいますし、一匹でも多く捕れば自分たちの利益になるので、魚が大きくても小さくてもとにかく捕りまくるのです。

TACは別名「オリンピック方式」や「ダービー方式」と呼ばれています。

しかし、この方法だと、次世代を作るまだ幼い魚まで捕ることで、将来の漁獲量が減ります。また、一

齊に捕りまくるので、売り切れない魚が出て、値崩れが起きやすくなります。

その結果、漁業者は生活が苦しくなってしまうのです。

さらに、すべての魚に上限を定めているわけではありません。

2013年時点で、約350種に及ぶ漁業を対象にした魚の種類に対して漁獲量が定められているのは、サンマ、スケトウダラ、マアジ、マイワシ、マサバ及びゴマサバ、スルメイカ、ズワイガニの、たった7魚種のみです。

これでは、捕り放題と言っても過言ではありません。

一方、漁業先進国である、ノルウェー、アイスランド、カナダ、ニュージーランドなどの国は、TAC方式の漁業は行っていません。

これらの国では、漁業者または、漁船ごとに漁獲量を割り振るIQ方式、または、その割り振られた漁業枠を金銭で取引できるITQ方式を取り入れています。

この方法では、捕りすぎを防ぐことで、魚の減少や値崩れを防げるので、漁業者の収入が安定します。日本では年々漁業をやる人が減っていますが、漁業先進国では「お金を稼げる仕事」として若い人に人氣が高い仕事になっているのです。

日本では漁獲量が年々低下しており、このままの方法をずっと続けていけば、いつか水産資源が枯渇するかもしれません。

そこで、漁業を持続可能にしていくための大切な考え方に、「レジームシフト」というものがあります。

この概念を作り出したのは水産学者の川崎健さんで、ボクはこの方に大切なことをたくさん教えてもらいました。心から尊敬する師匠です。

レジームシフトをそのまま説明するのはちょっと難しいので、分かりやすい例でお話しましょう。たとえばイワシ。イワシの個体数は常に一定ではなく、少ない年や多い年などばらつきがあります。ニュースなどでも「今年はイワシが不漁です」とか「今年はイワシの当たり年です」などと報道されますね。

イワシの場合は53年シフトといって、53年周期で増えたり減ったりなのでこぼがあります。

波線グラフを思い浮かべてください。増えたときは波が基準線の上に、減ったときは波が下になります。この波が上に来たときにはたくさん捕ってもへⅠゝが、下になっているときに大量に捕ると、へⅡゝ。

イワシは53年シフトですが、他の魚介類はまた異なります。

ノルウェーのような水産立国では、こうした科学的根拠こんきよに基づいて漁を行うため、捕りすぎを防げます。つまり、持続可能な漁業になるのです。

「水産資源が減っているから乱獲をやめよう」の一言で片付けるのではなく、④ レジームシフトにのつとった漁業が、これからの時代、益々大切ますますになっていくのではないでしょうか。

(武本匡弘『海の中から地球を考える』プロダイバーが伝える気候危機』汐文社)

問い一、本文中の空らん「 」AとCに入る語句として最も適切なものを次の中からそれぞれ選び、

記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度以上答えてはいけません。

ア そして イ たとえば ウ あるいは エ けれど

問い二、——線部①「知ることは希望」とありますが、作者がそのように考える理由として適切なものを

を全て選び、記号で答えなさい。

ア 知ることによって、何が問題なのかという問題点に気付くことができるから。
イ 知ることによって、環境によくないものを全てなくした生活を送ることができるから。
ウ 知ることによって、ショックを受けたり不安になったりする気持ちと向き合うことができるから。
エ 知ることによって、解決に向けてのアクションにつなげることができるから。
オ 知ることによって、今ある生活を大きく変えなくてもいいと気付くことができるから。

問い三、——線部②「2048年には海から食用魚がいなくなる」とありますが、

(1) この説が考えられた根拠として本文で挙げられているものを三つ、箇条書きにして答えなさい。
(2) (1)で答えた根拠の他に、ここ約50年間で魚がいなくなった大きな原因として筆者が述べているものを、文章全体をふまえて答えなさい。

問い四、——線部③「TAC」漁業とありますが、

(1) これは、どのような方法の漁業のことだと説明されていますか。文末が「く方法」につながる形になるように二十字以内でぬき出して答えなさい。
(2) この漁業の問題点を一文にまとめて答えなさい。

問い五、本文中の空らんへ Ⅰ・Ⅱに入る文として最も適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア 全体の漁獲量は変わりません
- イ 問題ありません
- ウ 周期の変動が起きてしまいます
- エ 絶滅の危機にさらされてしまいます

問い六、——線部④「レジームシフトにのった漁業」とありますが、これは、どのような漁業だと

述べられていますか。本文中の言葉を用いて、三十五字以内でまとめて答えなさい。

問い七、この文章で述べられている内容として適切なものを全て選び、記号で答えなさい。

ア 海で起きている問題は、自分たちの生活とつながっている問題であると自覚している人は多いが、行動に起こせないのが現実である。

イ 海を守るための活動はまったなしの状況じょうきょうにあるので、自分の意見を主張し、とにかく行動を起こすのが一番の解決策である。

ウ 日本で行われているTAC漁業は、「オリソニック方式」や「ダービー方式」と呼ばれており、その結果として漁業生産量の減少をまねいている。

エ I-Q方式、I-TQ方式と呼ばれる漁業がおこなわれている国々では、収入が安定するため、漁業は若い人に人気のある職業になっている。

オ われわれが日ごろ食べている魚には、すでに代用魚となっているものがあり、たくさん魚が売られているからといって安心はできない。

問い八、——線部「ベストはなかなか難しい、でもベターならできる」とありますが、この本文中で述べられているさまざまな具体例以外に、あなたが環境問題に対して自分自身で取り組むことができそうな「ベター」な（何もしないより良い）例を「ベスト」な（最も良い）例と比べる形で書きなさい。

三、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。ただし、字数制限のある問いに答える場合は、「、」「や」「。」などの記号も一字と数えます。

中学一年生の晴美はクラスの仲間から「キンタ」と呼ばれる活発な少女である。合唱コンクールに向けた初めての朝の練習がクラスで行われた。その練習が終わるころ、部活動を優先して合唱練習には参加していなかった岳が、突然顔を出した。本文はその練習終わりの場面である。

晴美は、すでに曲は終わっているのに、まだ音楽が流れているような気がしていた。音楽が自分の体の中でたゆたっているのだろうか。それともクラスの空気の中でなのか。きらめく余韻の微粒子が、そこここに漂っている感じだった。

もっとひたっていたかっただのに、岳の登場で余韻は蹴散らかされた。相変わらず岳は、前向きな雰囲気**をぶちこわす奴だ。**

① 高揚感から一気に弛緩した空気に変わり、いったん後ろに下げた机をもとに戻そうと、机を引きずる生徒も出始めた。せっかく、初めて合唱らしい合唱になったのに、こんなふうにしまりなく、《 a 》練習が終わるのは良くない。

指揮者の早紀は、終わりの挨拶をするでもなく、明日のことを言うでもなく、ただその場に突っ立って、困ったように **I 目を泳がせている。**

晴美はサツと早紀の横に出て、声を張り上げた。

「みんな、朝練初日、お疲れ様でした。明日もやるから、また頑張ろうね！」

「キンタ、了解」

他にもはーいとか、おうとか、ポジティブな返事がそこかしこから聞こえた。晴美が早紀を見ると、ホッとしたように微笑んでいる。なんだかイラッとした。

自分も机を戻そうと動きかけた早紀を、晴美は呼び止めた。

「ねえ、水野さん」

「はい」

ついきつめの口調になってしまったのか、早紀は気をつけの姿勢をしている。

「水野さんは指揮者なんだからさ。練習の始めとか終わりとか、もう少し仕切ってほしいんだよね」

「う、うん」

早紀はうつむき加減になって、晴美を②上目づかいで見上げた。

「涼方りょうまがまともにも歌ってくれたおかげで、せっかかない感じに盛り上がってきたんだからさ。今日はわたしが仕切ったけど、頼たよられてばかりでも困るし。指揮者なんだから、みんなをまとめないよ」と

そんな言い方をする、早紀がますます萎縮いしゆくしていくのは分かっているのに、和なごやかに伝えなきやと思っているのに、③晴美の口から飛び出した言葉は想定外につんけんしていた。上目づかいだった早紀の目が、スローモーションで下に落ちていく。

「ごめんなさい」

早紀はしおれた案山かかし子こみたい、肩かたを落とした。これではまるで晴美が早紀に説教をたれているか、いじめているみたいに見える。「説教」はあながち間違まちがってはいないけれども。

晴美が《 b 》周囲をうかがうと、こちらを注視している涼方に気づいた。晴美はややうろたえた。

さつき合唱が終わったとき、晴美はまっさきに最後列にいる涼方を振り返った。あのときも涼万の視線は早紀に注がれ、何やらジェスチャーで会話しているようだった。心に小さくひっかかっていた、その光景が思い出された。

「ちょ、ちょっと、あやまらないですよ。ま、わたしも、もちろんクラスを盛り上げていくけどさ。水野さんも頑張ってたことだよ」

と、すかさずフォローにまわった。早紀は決意するように下くちびるをかむと、まっすぐ晴美を見つめた。目の奥おくに力が宿おっている。

「うん、分かった。ありがとう」

離はなれていく早紀の華奢きゃしゃな後ろ姿を見ながら、④小首こくびをかしげた。

あの子、おとなしすぎると思っていたけど、そうでもないのかな。ま、指揮をするのは、確かにうまいけど。でもなあ……。

晴美は指揮者を決めたときのことを思い出して、⑤くちびるを突き出した。あごに梅干しみたいなしわが寄る。

本当は自分が指揮をしたかったのだ。みんなの前に立って指揮棒を振りたかった。目立ちたがり屋な性しょうぶん分の、Ⅱ格好かくごうの役目だ。適役てきやくだとも思う。そう、かなり真面目にやりたかったのだ。

あれは、夏休みに入る前の音楽の授業のときだった。合唱コンクールの自由曲を決めるのと同時に、指揮者、伴奏者ばんそうも選ぶことになった。伴奏者は音心おんこころだけが立候補してすんなり決まったが、指揮者は誰だれも手を挙げなかった。

音楽の宮下先生が教卓きょうたくを指でつつきながら、

「誰か指揮者やってみたってみたいっていう人はいないの？」

とクラスを見わたした。反応がない。

晴美の席は一番前だった。⑥脈脈がとんとん速く打つのが分かる。手を挙げればすむことなのに、挙げられない。ふだんの晴美なら、考えるより先に行動しているのだが。

よりによって一番前の席だから、後ろの様子が分からない。躊躇ちゅうちよしているうちに、他の誰かが手を挙

げてしまうのではないかと、気が気でなかった。誰かひとりでも立候補すれば、すんなり決まってしまうに違いない。

晴美は思い切った後ろを振り向き、ぐるりと様子を見わたした。みんな先生と目を合わさないように、ややうつむき加減なのが分かる。

「困ったわねえ」

宮下先生の「困った」は、クラスのことを考えてというよりは、「c」を決めて授業を進めたいのに、という気持ちかじみ出ていた。休みが多いから、今日は猛スピードで授業を進めたいのだろう。

「やる気があればいいのよ。やる気が」

宮下先生の投げやりな言葉は、かえって晴美を勇気づけた。

やる気があればいいんだ。それなら出来る！

晴美は腕を机から浮かした。⑦ 自分の腕なのに、鉛みみたいに重たかった。そのとき、

「先生、さすがにやる気だけじゃまずいと思います。音楽性がないと」

音心が珍しく発言した。鉛の腕は簡単に机に着地した。

「ま、そうよね。じゃ、どうしよ。んー。このクラスで吹奏楽部の人っていたっけ？」

⑧ まずい展開になってきた。晴美は両こぶしを握った。

どうして、音楽性イコール吹部になっちゃうわけ？ 確かにうちの中学にはコーラス部がなくて、音楽系の部活っていえば吹部だけだけど。部活だけで決めるっていうのはどうよ？

不満が「d」頭を駆けめぐる。

晴美、いいから早く手を挙げる。今ならまだ間に合う！

脳は命令しているのに、音心の言った「音楽性」がまるでどこかの神経にひっかかってしまったみた

いに、鉛の腕は持ち上がらない。

やりたいことをやりたいと言えない自分。こんなありえない自分に会うのは初めてだ。理由は明白。

晴美はオンチだったのだ。

保育園の学芸会のとときに、六歳年ろくさいの離れたお兄ちゃんに言われたひとことが、実は今でもトラウマになっている。演目のひとつに合唱があった。学芸会の帰り道、お母さんが合唱をほめてくれると、お兄ちゃんが笑いながら言った。

「晴美、お前ってめっちゃ声でかいから、すぐ分かったぞ」

ここまでは良かったのだが、

「ひとりだけアルト歌ってたのか？」

と III 茶々を入れてきた。

「アルトってなあに？」

「低い音」

「ん？」

晴美が首をひねると、お兄ちゃんは調子に乗った。

「晴美、音ずーれずれ。そういうの、オンチって言うんだぞ」

すると、まわりにいた園児たちがオンチの意味は分からないが、ウンチと似た言い回しが面白おもしろかったのか、

「オンチ、オンチー」

とはやしたてた。晴美はわっと泣き出した。そのあと、お兄ちゃんはお母さんにこっぴどくしかられたが、園ではしばらくオンチとからかわれ続けた。

保育園からの幼なじみは今でも何人かいるけれど、もうそんなことは誰も覚えていないだろう。小学校に上がってからのこのかた、いつも結構気をつけて歌ってきた。

家族でカラオケに行くと、お兄ちゃんがにまにま笑っているときがあるけれど、学校ではオンチと言われたことはない。だから、だいじょうぶなはず。

だけど、音楽性なんて言われちゃうと……。

「あれ、吹部って井川くんだけ？ 井川くんは伴奏者だし、困ったな」

宮下先生がまたぼやいた。すると、

「はい」

か細くて透明な声の矢が、晴美の背中に突き刺さった。

「ああ、水野さん。吹部だったわね。あなた、指揮やってくれない？ 出来るでしょ？」

宮下先生がぐいぐい攻めていく。しばらく間があいた。晴美は机の上で両手を握り合わせた。

出来ないって言って。無理って言って。

祈るような気持ちで念力を送った。

「……はい」

早紀の言葉に、宮下先生だけでなく、クラス中に安堵の空気が流れた。晴美だけが、早紀の声の矢のせいなのか、^⑨胸に開いてしまった小さな穴がしくっと痛んだ。

(佐藤いつ子『ソノリティ はじまりのうた』KADOKAWA)

問一、本文中の空らん ≪ ≫ a r d にあてはまる最も適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度以上答えてはいけません。

ア さっさと イ きらきらと ウ ぐるぐると エ ずるずると オ ちらちらと

問い二、——線部①「高揚感から一気に弛緩した空気に変わり」とありますが、この時のみんなの状態を説明したものととして、最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア みんながもっと練習をしたいと思っていたのに、岳の登場でやめざるをえなくなりました。

イ 初めて歌えた喜びをみんなが感じていたのに、歌い終わったとたん気がぬけてしまった。

ウ 歌声がひびきあってみんなが一つにまとまっていたのに、岳の登場で台無しになってしまった。

エ 実力以上の歌声にみんなが感動していたのに、歌い終わったとたん現実にもどされてしまった。

問い三、——線部Ⅰ「目を泳がせている」・Ⅱ「格好の」・Ⅲ「茶々を入れてきた」の意味として最も適切なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

Ⅰ 「目を泳がせている」

- ア 苦しんでいる
- イ とまどっている
- ウ 驚いている
- エ 考えている

Ⅱ 「格好の」

- ア ぴったりと当てはまる
- イ 前から興味がある
- ウ 他の人によく見える
- エ ずっとねらっている

Ⅲ 「茶々を入れてきた」

- ア 質問してきた
- イ 心配してきた
- ウ いじめてきた
- エ かまってきた

問い四、——線部②「上目づかいで見上げた」とありますが、この時の早紀の心情として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分の代わりに仕切ってくれた晴美に対して感謝している。

イ きつめの口調で話しかけてきた晴美の顔をうかがおうとしている。

ウ 自分を責めるような発言をする晴美に取り入ろうとしている。

エ 真剣しんけんに助言をしてくれた晴美に対して申しわけなく感じている。

問い五、——線部③「晴美の口から飛び出した言葉」とありますが、晴美が早紀に言いたかった内容はどのようなことですか。「ということ」につながる形で二十字以内にまとめて答えなさい。

問い六、——線部④「小首をか上げた」・⑤「くちびるを突き出した」とありますが、それぞれどのような心情を表していると考えられますか。最も適切なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア 不満 イ 疑問 ウ 納得 エ 不安

問い七、——線部⑥「脈がとんとん速く打つのが分かる」とありますが、この時の晴美の心情はどのようなものですか。次の文章の1・2・3に当てはまる言葉をそれぞれ指定された字数で探し、ぬき出して答えなさい。

もともと（1 十字）の晴美は指揮者をやってみたいのだが、（2 三字）だったことを気にして手が挙げられず、他の誰かが（3 三字）してしまうのではないかと焦あせっている。

問い八、——線部⑦「自分の腕なのに、鉛みたいに重たかった」とありますが、これは、晴美がどのような状態であることをたとえた表現ですか。「状態」につながる形で十五字以内にまとめて答えなさい。

問い九、——線部⑧「まずい展開になってきた」とありますが、クラスの指揮者選びの過程で、どのよ

うな状況^{じょうきょう}からどのような状況へ変化したことが晴美にとって「まずい展開」なのですか。本文中の言葉を使って、具体的に五十字以内で書きなさい。

問い十、——線部⑨「胸に開いてしまった小さな穴がしくっと痛んだ」とありますが、晴美のどのような心情が表現されていると考えられますか。次の中から適切でないものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 指揮者を先生に言われるがままに引き受けた早紀をねたましく思う気持ち
- イ 指揮者を生徒の意見に流され強引^{ごういん}に決めてしまった先生をうらめしく思う気持ち
- ウ 指揮者に名乗りでる勇気を最後まで持てなかった自分を責めて後悔^{ごうかい}する気持ち
- エ 指揮者を誰でもいいからとにかく早く決めようとしたクラスの人に失望する気持ち

